



リスだって木を植える 村山由佳

先日たまたま仕事で会った人は、「僕は小説でも何でも電子書籍の形でしか読まないんですよ」と自慢そうに言った。

「紙なんかね、無駄です、無駄。紙さえ使わなければどれだけ環境への負荷が減ることか」

そうでしょうか、でも……とやんわり異を唱えながら、私は何だかとても淋しかった。

子どもの頃から、紙の本にどれだけ救われてきたか知れない。古い本特有の湿った匂い、真新しいバルブとインクの匂い、ページのこすれる音や、手触り。大好きな本を、泣きながら抱きしめて眠った夜だってあった。だからこそ私も作家になろうと思ったのだ。

これはよく誤解されているのだけれど、紙を使わないことが地球に優しいわけではないし、木の伐採が環境破壊に直結するのでもない。むしろ逆だ。木は、育つ

てゆく過程で最もたくさん二酸化炭素を吸ってくれる。つまり、無駄なく紙を使い、木を使い、次の若木を育てる正しいサイクルを作ることこそが環境を守るのだ——という真実を知らずに物を言う人が多いのは、憂うべきことだと思う。

物書きになってまだ間もない頃、月に一度、朝のニュース番組で旅のリポーターをしていたことがある。(いのちの輝きを求めて)というテーマのもと、極寒の釧路でシマフクロウを探して雪の森を歩きまわったり、経験もないのにいきなりアイゼンを付けて三千メートル級の白馬岳に登ったり、東洋のアマゾンと呼ばれる西表島のマングローブ林に分け入ったりした。人間、腹さえくれば何とかなるということを体で思い知った一年間だった。

そんなハードな旅の中で、今でも折にふれてほのぼのと思いだす光景がある。世界遺産にも指定された白神山地のブナの森。頭上で折り重なる葉が光に透ける様はまるで繊細なステンドグラスのようで、降り注ぐ木漏れ日に指先まで緑色に染まりながら歩いてゆくと、ふと、案内のレンジャーさんが私を手招きしながらしゃがみこんだ。

指差す地面を見れば、ブナの新芽が十本くらい、一カ所からまとまって生えている。双葉を広げた姿が貝割れ菜のようだ。「ほら、そこにも、あっちにも。どうし

村山由佳(むらやま ゆか) ●東京都生まれ。立教大学文学部卒業。1993年、『天使の卵〜エンジェルス・エッグ』で第6回小説すばる新人賞を受賞。2003年、『星々の舟』で第129回直木賞を受賞。09年、『ダブル・ファンタジー』で第22回柴田鎮三郎賞、第16回島清恋愛文学賞、第4回中央公論文芸賞を受賞する。主な作品に『翼』『おいしいコーヒーのいれ方』シリーズなど。最新刊は、『アダルト・エデュケーション』。



てまとまって生えてきたかわかりますか?」

私が首を横にふると、彼は言った。「リスが植えたんですよ。秋が深まると、リスたちは冬場の食糧を蓄えようと、地面を掘って木の実を埋めておくんです。でも時々、どこへ埋めたか忘れちゃうらしいんだ。それが、春になって雪が溶けた時にこうしてまとまって芽を出すんです」

つまりね、リスたちもブナの森を作っているんですよ、と彼は微笑んで言った。今、私の住んでいる信州は深い雪に閉ざされている。あのブナの森のリスたちも今ごろせっせと雪を掘り返しては、大事に埋めておいた木の実に命をつないでいるのだらう。けれど、白銀の世界がやがて鮮やかな緑色に変わる頃、大地からは新しい命が芽吹き、水と光を吸って育ち、いつか再び森の生きものを、そして私たちを育んでくれるようになる。そう、リスだって木を植える。私たちに、何が出来たらだらう。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙づくりの前に、森づくり。

森林はきちんと管理すれば、ずっと利用できる資源。製紙会社は、30年以上前から植林活動をはじめ、現在では日本を含めて世界9ヶ国、植林地の合計面積は約6,500km²にまで広がっています。なんと、これは東京ドーム約14万個分の面積。ちなみに、2012年度までに植林面積7,000km²を目指しているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

◆次回は3月31日号、細川護熙さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake